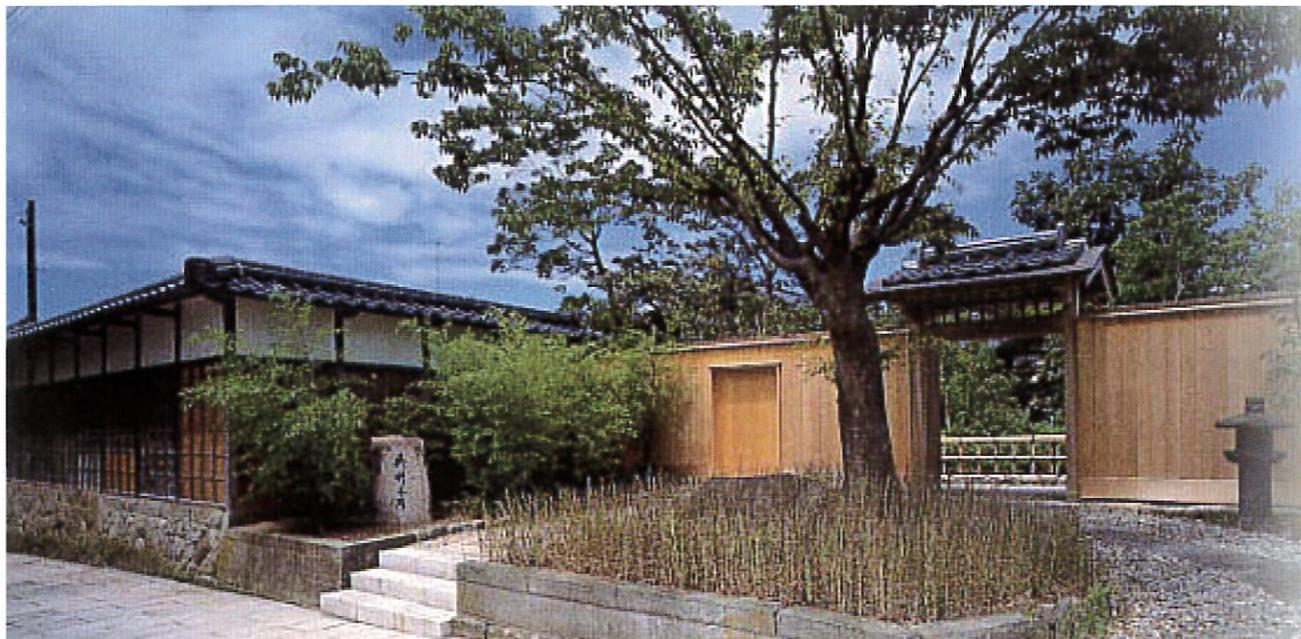


白山市文化施設館報

白山ミュージアム



呉竹文庫正面

呉竹への想い

手取川の河口、海に向かって左岸の湊町に、周囲を竹や桜、櫻などの樹木に囲まれ、創設者「熊田源太郎氏」の人柄を偲ばせるように、ひとつそりと佇んでいるのが「呉竹文庫」です。

大きなタブの木を目印に行くと、すぐには辿り着きます。タブは高さが15メートル以上もあり、近隣では珍しい大きさです。

呉竹文庫の建物は元々、源太郎氏の別邸として大正後期から昭和の初期にかけて整備され、氏の保養することが目的であつたため、茶道や読書にいそしめるような間取りとなっています。

数寄屋風の建物は、まるで桂離宮を彷彿させる柱や天井、棚、襖に至るまで当時の職人の技が施されています。

また、庭園も石や木の配置が絶妙で、喧騒な世俗を忘れさせてくれるように、訪れた人を迎えてくれます。

秋には前を流れる熊田川に鮭の遡上が見られ、いつそう情緒を醸し出しています。

contents

■ 呉竹文庫	1	■ 松任ふるさと館	12
■ 千代女の里俳句館	2・3・4	■ 石川ルーツ交流館	13・14・15
■ 呉竹文庫	5・6	■ 鳥越一向一揆歴史館	16・17
■ 鶴来博物館	7・8・9	■ 平成24年度行事予定表	18
■ 松任博物館	10・11		

No. 6
平成24年3月31日

高濱虚子の松任采訪 ～暁鳥敏との交流～

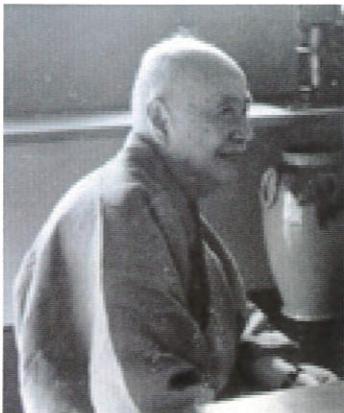
暁鳥敏と俳句

「十億の人に十億の母あらむ
もわが母にまさる母ありなむ
や」の歌で知られる暁鳥敏は、
明治10年（一八七七）に石川郡
出城村北安田（現白山市北安田
町）の真宗大谷派明達寺に生ま
れ、近代的な宗教哲学を広め、
日本の思想界に大きな足跡をの
こした人物です。

近代俳句の創始者である正岡
子規の遺志を継ぎ、俳誌『ホト
トギス』の主宰として多くの俳
人を育て、晩年には文化勲章を
受章することになる俳人高濱虚
子（一八七四～一九五九）は、
敏の3歳年上でした。



暁鳥敏



高濱虚子

た。19歳の頃から「非無」と号
して俳句をはじめ、京都の真宗
大学在学時には、総合雑誌『日
本人』の俳句欄選者であつた

高濱虚子に影響をうけて投句を
重ね、やがて手紙で親しく交流
するようになりました。

近代俳句の創始者である正岡
子規の遺志を継ぎ、俳誌『ホト
トギス』の主宰として多くの俳
人を育て、晩年には文化勲章を
受章することになる俳人高濱虚
子（一八七四～一九五九）は、
敏の3歳年上でした。

そんな虚子がここ松任を生涯
に五度訪れていました。その折々
に詠んだ彼の俳句をはじえながら
順を追つてご紹介いたします。
した。

一方当時36歳であった敏は、
思想破綻のため東京での活動が
停滞し、明達寺での「逼塞」を余儀
なくされていました。虚子は後
年「僧暁鳥敏を訪ねたのではな
くつて、俳人暁鳥非無を訪ねた
のであつた」と語っています。
庫裏の一室にはランプの下に大き
きな炉が切つてあり、炉の角には
物を捨てる甕がありました。

前掲の歌で知られるように
「うたびと」のイメージで知ら
れる敏ですが、若い頃は俳句に
熱中していた時期がありまし
た。敏は雑誌発行のノウハウに
ついて、「ホトトギス」发行人
の虚子から教えてもらいました。
虚子は仏教の講義を敏から
定期的に数年間学びました。講
義がすむと四方山話をし、虚子
の妻から食事のもてなしを受け
るなど、親密な交際をもちまし
た。二人はお互いを「非無和尚」
「虚子さん」と呼び合ひそれは
終生変わることはありませんで
した。

この年39歳の虚子は、これまで
の小説家志向をいったんやめ
て、河東碧梧堂らの新傾向俳句
に対抗し本格的に俳壇に復帰し
たところです。

京へ留学した敏は、ただちに神
田猿楽町の虚子宅を訪問し、二
人ははじめて対面したのでし
た。敏は雑誌発行のノウハウに
ついて、「ホトトギス」发行人
の虚子から教えてもらいました。
虚子は仏教の講義を敏から
定期的に数年間学びました。講
義がすむと四方山話をし、虚子
の妻から食事のもてなしを受け
るなど、親密な交際をもちまし
た。二人はお互いを「非無和尚」
「虚子さん」と呼び合ひそれは
終生変わることはありませんで
した。

北陸旅行のおりの大正2年

初めての訪問

（一九一三）10月19日の夕刻、
39歳の虚子はひとり松任駅に降
り立ちました。明達寺の敏を訪
ねるためです。ホームで敏の出
迎えを受け、中町の聖興寺・千
代尼塚を参拝したあと明達寺で
一泊しています。

この年39歳の虚子は、これまで
の小説家志向をいったんやめ
て、河東碧梧堂らの新傾向俳句
に対抗し本格的に俳壇に復帰し
たところです。

した。

愛媛県生まれの虚子にとつては塩漬茄子が非常に珍しかったらしく『小諸雜記』にも「貯蔵」という一文で紹介されています。

炉の隅に物捨甕も置かれあり

炉の上に低く吊たる洋燈かな
ぎんなんの落ちてくさるや掃かぬ色

この後敏はみごとに再生を果たしますが、一年の大半を国内外各地への講演旅行と著述活動に費やすこととなり、虚子もまた同じく旅の中に多くを過ごすこともあって、二人の交流も文通のみとなってしまいました。

昭和21年の来訪
俳壇での地位をゆるぎないものとし、『ホトトギス』六百号記念会金沢大会に出席するため来県した72歳の虚子は、その前

日の10月7日の夕刻に明達寺を訪れています。

実はその年の6月25日、長野県へ講演旅行中の敏は、小諸に疎開中の虚子を訪ね、明達寺への来訪を約束していたのでした。

た。

松任駅では、敏の秘書である野本永久が虚子を出迎えました。42歳の彼女は、昭和14年から敏の紹介で虚子に師事してお

り、虚子の主宰する俳誌『ホトギス』雑詠の部で俳句が巻頭を飾るなど活躍していました。

彼女は用意してあつた明達寺の人力車の棍棒を取ると、戸惑う虚子を乗せたまま明達寺へと向かいました。

「師の車を曳くのは弟子の役、この車を曳くのは野本お前だ」と敏に言われたからです。虚子を歓待するための、敏と永久のまごころが伝わるエピソードとして現代まで長く語り伝えられています。

昭和24年の来訪

秋晴や盲ひたれども明らかに盲ひたりせめては秋の水音を一期一会秋の御空の雲迅し 非無

方には多数の俳人を伴い明達寺を訪れ一泊しました。

この晩、敏は虚子に持ちなれた数珠を贈ります。虚子は「私の死ぬる時分には必ずこれを手首に掛けて貰います」と約束しました。

虚子初の能登入りを耳にした

33年ぶりの来寺に話が弾む中、虚子は敏に勧められて書き上げた小説の草稿を、敏の前で読んで聞かせていました。敏は昭和12年に両眼を失明していました。小説はのちに名作といわれた『虹』です。

草の実に急がずに曳く陣かな
主先づうましと賞めてかます食ふ
長き夜や老の必ず目覚む刻

老僧の盲ひて榻に秋彼岸

松茸に晝の仕度の忙しく
秋驟雨人の情にうるほひて

翌日金沢の料亭鶴甚で催された六百号記念句会に虚子・敏の二人は仲良く共に出席していました。



明達寺

翌朝10時から明達寺で句会を開き昼食後二人は別れました。

惜春や金沢を出て北安田

惜春や金沢を出て明達寺

山吹の花の蕾や数珠貰ふ

もろともに病忘れて春惜む

春惜し人の一会も亦惜し

春惜し人の別れも亦惜し

老松もあり古い柳も老僧も

老僧と一期一会や春惜し

本堂の横を流れる春の水

ここに斯くあること春を惜しむこと

この寺の木の芽賑か法の雨

昭和28年の来訪

10月7日明達寺の門前に一台の自動車が止まりました。9月

の九州講演旅行以来、病に臥した敏を見舞うため、山中温泉俳

句大会から急きよ虚子が駆けつけたのです。

固く握手を交わす敏と虚子。

わずか五分間ばかりの面会時間でした。

この時点では敏の病状はさほど重くはないと、周囲では見られていたようですが、老友虚子にとつては心中に去來するものがあつたのでしょう。そしてこれが現実に、二人のこの世での最後の別れとなってしまいまし

た。

「虚子さん、縁あつてこんな田舎の寺に四度も訪ねて下さった。記念にあなたの句碑を寺の境内に建てたいと思って、先度から野本と語り合って居りました。何か書いて下さい。わたしの歌碑とあなたの句碑と兄弟分の石で建てたいと思うて居ります。」

す。

「それはありがとうございます。光榮に思います。明達寺で出来た句を書いてお送りいたしましょう」

稲の道車を驅りて故人訪ふ

秋晴の門にさわぐ子僧病めり
し、翌昭和29年8月27日、敏は

77歳の生涯を閉じています。虚子は次のような別辞を贈りました。

常なきが如常のごと桐一葉

最後の来訪

昭和32年4月11日、83歳の虚

子は家族らとともに明達寺を弔問します。境内には前年の8月、敏の一周年忌法要を記念して虚子の句碑「秋晴や盲ひたれども明らかに」と敏の句碑「一期一会秋のみ空の雲はやし」が生前の約束どおり建立されました。

りません。

(千代女の里俳句館 小中)

※虚子の俳句の中に、現代においては一部不適切な表現がありましたが作品の独自性を尊重してそのまま掲載しました。



暁鳥敏・一期一会の句碑



高濱虚子・秋晴の句碑

文字の香り漂う 吳竹文庫

おいたち

呉竹文庫は、旧北前船主熊田源太郎氏が能美郡湊村に大正11年に設立した私設図書館でした。

源太郎氏は所蔵する多くの書籍を地域住民に貸出し、読書をする楽しみや喜びを共有しようとしたのです。

昭和10年に源太郎氏が亡くなつてから、永らく休眠状態が続きましたが、嗣子卓郎氏の篤志により、平成2年から旧美川町（現白山市）が財團法人を引き継ぎ運営の主体となつてから、再度公開に踏みきり、書籍のみならず・美術工芸品や古文書などの整理保管と公開をする施設として再出発をしました。



1階 書庫入口

見どころ

呉竹文庫の魅力は、三つのポイントがあります。

一つ目は、明治から昭和初期にかけて源太郎氏が収集した一万四千冊余りの書籍です。漱石全集の初版本、正岡子規全集、鷗外全集、有島武郎全集など非売品も含まれています。これら

三つ目は、大正後期から昭和3・4年にかけて保養のための別邸として造られた家屋群です。全体が数寄屋風の建物は、氣品が漂い、日本庭園と相まって喧騒な世俗から一気に静寂な文学世界へといざなつてくれます。

建物の中に入りますと、土蔵は鞘板で覆われてなまこ壁が施され、1階は重厚な出入り口の書庫となつており、2階は立体感のある鏽絵が施された総欅造

通常では簡単に見られない貴重な図書が直接に見られるのが特色です。



2階 書斎

和室は簡素で静謐な趣があり、1階には瀟洒な茶室を備えており、2階は菊の襖絵が特長の菊の間には、源太郎氏が東本願寺に勅使門を寄贈したことに対するお礼に大谷光演氏が筆をとられた扁額がさりげなく掛けられており、平成再興後に来館

された当時の薬師寺管長の清水公照翁の揮毫による「呉竹文庫」の扁額が掲げられた和室も備えています。また茶室の控えの間として使われている和室は、白樺の床柱に特色があり、落ち着いた雰囲気を醸し出しています。

熊田源太郎氏とは

設立者熊田源太郎（幼名源一郎）は、明治19年（1886）に生まれ、十七歳で熊田家の分家（熊源）の三代目当主となりました。県下有数の大地主であり、実業家でもあり、湊村長もあり、二度にわたり勤めました。

早くに当主となつた理由は、父親が亡くなつたことによるものでしたら、本人は向学心が抑えられずに様々な書籍を読み漁り、「私は紙魚になりたい」というほど読書好きで知識欲旺盛人でした。

氏の功績を一言するなら、図書館を設立し、小舞子夏季大学講座を開講したように社会教育に情熱を注いだことと言えるでしょう。

惜しまれることは、昭和10年（1935）、住民に請われて二度目の村長に就任し、手取川大洪水の復興に尽力することです。

この当時、金沢に住み病がちな体を静養していた時に、郷里の為に何とかしてあげようと自らに鞭打つて執務をしていた矢先の出来事でした。

湊村民の誰もが涙を流し、葬列を見送りながら早すぎる死を悼みました。

太郎氏という人物がいて、その人柄や教養・見識の高さ、視野の広さを具体的に物語ることのできるところに、歴史的文化遺産としての価値が有り、長く伝えていくべき施設であると、見学した誰もが首肯するものです。

毎月第三日曜日は白山市民の方なら無料で入館できます。和室は部屋ごとに貸し館もいたしております、研修会場としてのご利用にも応じております。

休館日は、年末年始と毎週月曜日で、月曜日が祝日の場合は翌日となります。

ご利用の詳細については当館へお気軽にお尋ねください。

（文責 伊藤）

呉竹文庫の意義

呉竹文庫は、北前船主の財力や社会的地位を示すだけでなく、当時の能美郡湊村に熊田源

呉竹文庫では季節ごとの展示会を開催し、所蔵品を順次公開しています。文化活動として活用いただくために、毎月第三日曜日に呈茶会を催しています。

落ち着いた日本庭園を眺め、所蔵品の解説を聞きながら、侘び寂びの雰囲気を味わつてみてください。

また初心者の方には気軽に茶道に親しんでいただこうと、毎月第一日曜日に「あぐら茶会」を催しております。

ご利用方法

入館料は、個人三百円、二十名以上の団体ですと一人二百円

となっています。体に障害のある方や中学生以下の方は無料です。



縄文土器



鶴来博物館では今年度の春に、常設展の考古部門をリニューアルしました。これまで鶴来の出土品が主でしたが、吉野谷や河内地区にも素晴らしい縄文時代の出土品があるため、それらを中心とした内容に変更しました。

水田での米作りが始まる弥生時代になると、遺跡の数は激減し、かつて荒涼とした荒れ地であつた平野部に、その中心は

白山市全体の歴史を振り返ってみると、最初に人が住み始めたのは松任地域ではなく、旧石器時代の山麓（久保・阿手）なのです。

縄文時代になつても、下の表で解るように、遺跡の七割が山麓から発見されています。白山麓は、くるみ、栗、ドングリ、トチ、山菜、川魚、シカ、熊など、豊かな自然の恵みに溢れた住みやすい地域なのです。



このように、山麓の遺跡と移つていきます。鎌倉～戦国時代には、現在の白山市の骨格が、ほどできあがつていたと考えられます。

	1万年前 ↓	2,300年前 ↓	1,400年前 ↓	800年前 ↓	400年前 ↓	
	旧石器時代	縄文時代	弥生～古墳時代	飛鳥～平安時代	鎌倉～戦国時代	昭和40年の人口
山麓	2遺跡 (100%)	39遺跡 (63%)	2遺跡 (2%)	2遺跡 (3%)	22遺跡 (22%)	13,250人 (20%)
鶴来	0	7遺跡 (11%)	3遺跡 (3%)	24遺跡 (37%)	18遺跡 (18%)	12,229人 (18%)
美川	0	0	0	1遺跡 (2%)	2遺跡 (2%)	11,617人 (17%)
松任	0	16遺跡 (26%)	86遺跡 (95%)	37遺跡 (58%)	60遺跡 (58%)	29,649人 (45%)

時代別地域別の遺跡分布状況



いえれば縄文時代の遺跡といえます。では、実際に縄文時代の何が展示されているのでしょうか。
それは、土器と石器です。上の写真のように、縄文土器には派手な模様が付けられていることがよくあります。土器づくりは女性が担当していたようで、土器の模様は家紋を意味していると考える人もいます。模様は単なる装飾ではなく、当時の人々の深い思いが込められていましたのでしよう。遠く離れた場所でも、よく似た模様の土器が出士する事から、模様はひとつの人々の想いがつながっているのです。

狭い村だけで使用されているのではなく、広範囲の村々の人達が共通した認識のもとで使用されていました。よって、その模様を研究する事により、土器の年代を推定する事ができるのです。



石器は金属が無かつた縄文時代に、金属の代わりにも使用されています。木を切るための磨かれた刃をもつた石斧、土を掘るための割つただけで磨かれていない石斧（打製石斧）、魚を捕るために付ける重り（丸い小さな石に細い溝を付けて、ヒモで縛つても取れないように加工されている）。木の実をつぶしたり、割つたりするためのたたき石、石皿、凹み石が主な

石器は金属が無かつた縄文時代に、金属の代わりにも使用されています。木を切るための磨かれた刃をもつた石斧、土を掘るための割つただけで磨かれていない石斧（打製石斧）、魚を捕るために付ける重り（丸い小さな石に細い溝を付けて、ヒモで縛つても取れないように加工されている）。木の実をつぶしたり、割つたりするためのたたき石、石皿、凹み石が主な

石の道具です。
その他、色々なお祈りに使われた石棒や石冠もあります。科学的な医療技術のなかつた時代には、薬草やお祈りによつて、病気が治療されていたのです。左の写真の石棒は、長さが53cmもあり、細いタイプの石棒としては県を代表する優品です。石棒、石冠をコツコツと石で叩いて、砥石で磨いて作った縄文人の根気強さには脱帽です。



是非、实物を見に来て下さい。

鶴来博物館「青い目の人形」展



今年度の終戦記念日に合わせ、一品展「青い目の人形」を開催しました。この人形は、日本在住経験のあつたアメリカ人宣教師が、アメリカにおいて苦境にたたされた日本人を救おうと、日米親善を目的に、アメリカの子供達から、日本の子供達に送られた友情を示す人形なのです。

明治・大正時代には、多くの日本人がアメリカへ移民しており、カリフォルニア州だけでも二三万人にも達していました。ところが、不景気で失業者がふれるようになると、安い賃金でよく働く日本人は嫌われ、日本人排斥運動が起ります。大正一三年には日本人の入国を阻

止する「新移民法」がアメリカ議会で可決されてしまいます。

そんな中、ひとりの宣教師で教育者のシドニー・ルイス・ギューリック博士が、「子供の心には偏見はなく、友情にあふれている。子供世代から日米の親善と友好の理解を育てたい。」という理想から、教会、学校、青年団など二六〇万人の協力をえ、一年がかりで一万二千体の

人形を購入し、子供達の手作りによる服を着せ手紙を添えて、昭和二年のひな祭りに、日本各地の小学校・幼稚園へ、一体づつ人形を送ったのです。初めて見る青い目、金髪、洋服、起きると目が開く人形に日本の子供達は感激し、たちまちアイドルとなります。当時流行っていた童謡「青い目の人形」にちなみ、これらの人形は、「青い目の人形」と呼ばれるようになります。東京では、日米の子供達二千人、文部大臣、アメリカ大使が出席した国家上げての人形歓迎式典

が行われています。石川県でも、二〇五体の人形が県議会議事堂において歓迎会が行されました。

そして、日本の子供達からは、アメリカの子供達へ五八体（二県につき一体）の日本人形が、クリスマスプレゼントとして、お返しされています。

ところが大変残念な事に、昭和一六年の日米開戦により『青い目の人形はスペイだ！憎い敵だ！』と新聞で報道され始め、敵国人形として竹槍で突かれたり、焼かれたりして、悲しい運命をたどります。その一方で「人形に罪はない。」とひそかに保護する先生もいたようです。

昭和五七年、朝日小学校にその人形が奇跡的に残されている事がわかり、以後、当博物館において、日米友好のシンボルで、戦争のない平和な世界を望んでいる「青い目の人形」を、大切に守り続けています。

※県内に現存する人形は三体のみ。

平清盛 ゆかりの地 —白山市木滑—

仏御前の安産石

平安時代末、平清盛は当時の最高の地位である太政大臣となり「平家にあらずんば人にあらず」と言わせるほど、栄華を誇っていました。五十半ばの清盛は、ちまたで人気を博していました。白拍子の祇王の舞に魅せられ、館を与えて妾とします。そ

こへ、仏御前（加賀国出身。一四歳で叔父に招かれ上洛。）という白拍子が、清盛に歌舞を見せるため、祇王の館を訪れます。清盛は祇王に優る白拍子はいないと相手にしませんが、祇王はまだ一六歳で同じ白拍子の仏御前に同情し、清盛を説得してその歌舞を見る事となります。ところがなんと、清盛は仏御前が気に入つてしまい、祇王を館から追い出して、仏御前を妾として住ませてしまったのです。仏御前も懇願します。一七歳のまだ若い仏御前の髪は既におろされたり、その強い思いに心打たれており、その強い思いに心打た

館の障子に泣く泣く歌を書き残して去ります。

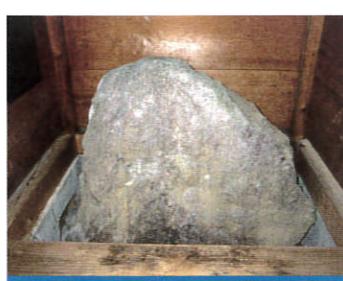
翌年の春、清盛は祇王を呼び出し、仏御前が退屈しているので、歌舞をして慰めるように命じます。祇王はもちろん断りますが、母に説得されやむなく舞い、死を決意します。しかし、母の事を思うと死ぬに死ねず、母と妹と共に髪をおろして尼になり、庵にこもってひたすら後生を祈るのです。

秋になり、三人が念仏していると、戸をたたく音がします。開けてみるとそこには仏御前が立っているのです。仏御前は、祇王から受けた恩を仇で返した事がつらく、館を抜け出して来たのだといい、過去の罪を許してもらい一緒に念佛させてほしいと懇願します。一七歳のまだ若い仏御前は既におろされたり、その強い思いに心打たれており、その強い思いに心打た

ず、仏御前を受け入れるのです。

しかし、清盛のもとにいたのは一年足らずでしたが、仏御前は清盛の子を宿しており、尼と

して子を産む事はできず、京を去り故郷（小松市原）へ帰る事になります。人目を避けるように近江、美濃を経て、越前大野から白山麓を越え、木滑にさしかつた所で産気づき、大きな石にもたれて男の子を産みます。



白山市木滑の神社前にある安産石

安産の神様。木滑の老女たちは、蚊を追いやうなど、出産の手伝いをしたので、仏御前はそのお礼として、以後、蚊がでないようにし、さらに、娘が父無し子を産まないようにもしてくれたと伝えられています。

※白拍子とは、当時庶民・貴族の間で大流行していた即興的な歌を歌い、舞う男装した遊女の事をいう。※仏御前の死因には、自殺、他殺説がある。

(文責 木田)

「古文書講座」

松任博物館では、企画展、特別展の他に、「夏休み工作」教室等も開催致しております。その中でも古文書講座は好評で、(初級編) (中級編) に分けて、各講座とも一回二時間、二講座を毎年行っています。

会となるよう、開催しています。
それでは、実際にご覧いただ
きましょう。少しでも古文書に
興味を持つていただければ幸い
です。

わかりますが、内部の様子はわかりません。ところが幸運なことに次ページの古文書に織田家の内部の様子が詳細に記述されているのです。

(牛首村 現白峰の) 家数は三百
程、奇麗で大家は長屋門があり、
玄関に武器を飾り、その構えは

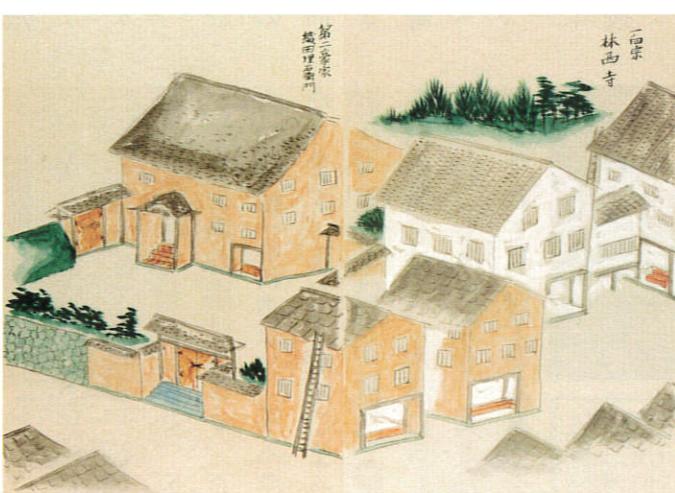
を残らず明け放つていたので、
屋内すべて隠れたところがなく、
今でも新築で、材木は檜ひのきを用い、
白木しらき造りであった。釘隠しは鍍金だくぎん（メツキ）され、欄間には様々
の透かし彫りがある。仏間と思
われる所はすべて蓮の花が極彩
色で描かれており、その奇麗さ
は目を驚かすものである。

古文書講座の初級編では、古文書とは何かと言う事から講師の方に教えていただいております。また、大変に短い時間ですので、ご自分で勉強される際に、参考となるように、古文書解説辞典など辞書、参考書のご紹介

書かれた白山登山の紀行文「白山道之栂」(しおり)の一
部です。この中には牛首村(現白峰)の家の
中の様子が詳しく書かれていま
す。白峰の伝統的建物がどのよ
うな物であつたかを調査するた
めに解説されました。

を中心にしていただきました。
最近では、携帯電話、パソコンの普及等で、手書きで書かれた文章を読む機会すら少なくなつてきました。この講座を受講していただく事で、少しでも古文書に興味を持つてもらえる機

下記の絵は、天保四年（一八三三）に書かれた白山登山の紀行文「続白山紀行」に描かれて いる牛首村家立之図です。白漆喰壁は林西寺、土壁は第二豪家織田理右衛門家の建物です。絵では建物の外観が良く



「續白山紀行」天保4年（1833）

下り坂百十人村の入戸に左から賀道と記す。傍示す。家
数百斗ばかり都とて、奇麗にし大。家ハ長屋門有て玄冠に武
器を飾る。其その構へ堂々たり。家作り皆三階也。然しかれ共世並
に三階造りて、内ハ則すなわち三階にて外より見れば壁に大き成なる窓を三段
に明けて、星に異にして、外より見れば壁に大き成なる窓を三段
由よし、上にて米を搗つゝに杷はふ事。雪の積るに志した可がひ、段々上に住居春する
此村の利左衛門と云ふ事。奈なしとて誠に大夫やうべの家と云べし。
戸障子残ら須(はず)明け放したる事。奈(なり)ケる故ゆゑ立入て見る
所なくい満まだ新宅にて材一木ハ檜ひのきを用ひて白木造り奈(なり)。
行障、藏金とみり欄間半身の彫透し有。佛(仏)間と思しき
所がまし蓮の花を極彩間ハさまざまの彫透し有。佛(仏)間と思しき
所ハ春すべて山岸十郎左衛門木戸口孫右衛門など名高き豪家有と
驚し侍ほぐる。山岸十郎左衛門木戸口孫右衛門など名高き豪家有と

「白山道之栄」天保2年（1831）

松任ふるさと館日本庭園

「紫雲園」の魅力

・所在地…白山市殿町56
・築山池泉廻遊式（1020坪）

松任ふるさと館の庭園は、前庭・両脇の側庭・主庭の4つの庭からなり、当時、毎日二つの造園業者を使い、約12年の歳月を掛けて完成しました。

前庭

玄関正面中央には、丹波鞍馬石の巨石を中心に長野県産の上松石を25石使用し、亀島石組が造られています。

側庭

東側側庭は、滝石の景石「砂かぶり」や福浦石の逸品、羽咋の油石、京都府の紅加茂などの名石が使用され、非常に鑑賞価値の高い景をなしています。



主庭

側庭を抜けると広々とした主庭が開け、池泉・中島を中心には園路が巡り、趣きがあります。築山池泉廻遊式庭園は、その



（文責 小林）



奥の築山部には珍しい全国各地の庭石や石燈籠が随所に配置されており、庭石だけで比較すると兼六園より素晴らしい石が多く使用されています。

園路を廻りながら次々に展開する景観を楽しめます。この庭園は、あらかじめ立ち止まって鑑賞すべきポイントを意識して設計されています。例えば、大きな樹木を植え、意識的に視界を遮ることで、その地点を抜けると一気に視界が開け感動を与えると言った工夫を凝らしており、こうした鑑賞ポイントは築山や橋の上などと言われています。

石川ルーツ交流館の経緯と意義（1）

序

「白山ミュージアム」を発刊するこの機会に、一般の方々にはこれまで充分に浸透がされていなかつたように見受けられる石川ルーツ交流館（以下、ルーツ館と表記）のコンセプトと緯・注目点について、もう一度原点に立ち返り、見詰め直してみたいと思います。



県庁跡石碑

美川の名称

美川という呼び名は、明治4年（一八七一）に能美郡湊村と石川郡本吉町が合併した時に、郡名の一字ずつを取つてつけたもので、俗に言う清流手取川にちなんだものでもありませんし、由緒のある名でもありません。

既刊書籍の多くは、明治2年説を採用していますが、同4年であることが国立公文書館に保管されている文書で明白になったことはルーツ館建設に際しての調査事業の成果の一つでした。その合併も一年足らずで解消され湊村は旧名に戻りましたが、本吉は美川という名称をそのまま引き継ぐという形で從来

吉も江戸初期までは「元吉」と表記され、それ以前は「藤塚」と「はさ場」が合されて「元吉」になつたと言われていますが、明確な時期や場所、名の由来は寺名を採用したという説がありますが、正確に特定されているわけではありません。

立地場所

ルーツ館が建つこの場所は厳密にいうと、江戸時代に本吉町会所（役場）があつた場所で、

その後、小学校が置かれたり忠魂碑が建つたり、建設会社が営業したりしていた場所です。

しかし、石川縣庁が明治の一時期にせよ設立されていたとい

う事実と、その時から縣名が石川縣となつたという歴史的な重みを広く周知させ、この地域の活性化を図ろうと計画が推し進められたのでした。

ルーツ館建設の折に、その実

が、完成を急ぐばかりで採用されず、縣庁業務の一部は町会所のあつた場所でも行つたであろうから、このまま良いと押しきられる様な形勢となり事業が進められました。

誰から細部にわたり尋ねられたら、そのように答えようと、歴史学者から見れば誠に稚拙で安易な対応しか出来なかつたのです。言い訳がましいかもしれませんのが、当時の美川町役場にはそういうことにこだわりを持つ職員が小生以外いなかつたのです。

しかし、石川縣庁が明治の一時期にせよ設立されていたとい

う事実と、その時から縣名が石川縣となつたという歴史的な重みを広く周知させ、この地域の活性化を図ろうと計画が推し進められたのでした。

県庁移転の理由

版籍奉還後も封建制を実質的に残し実施された廢藩置県が明治4年（一八七二）に断行され「加賀藩」は「金沢縣」と一旦はなるものの、同元年から2年にかけて行われた朝廷側と幕府側の内戦で、加賀藩は再三に亘る官軍側からの出兵要請に無言を貫き通し、大勢が決まる頃になつてようやく兵を動かすといふ日和見的な態度を取つたのでした。これに対して新政府は当然のことながら心地よいものではなく、兵力は弱いが百万石の誇りだけを持ち扱いにくい加賀藩武士を何とか抑え込もうと画策したのでした。

その結果、朝廷に逆らつた藩や加賀藩のような曖昧な藩には縣名に旧藩名を認めず、川の名や郡名をつけさせたとする政策が採られたという宮武外骨氏の説が有力な考察とされています。

現在でも、県名が旧藩名と違う名称が採用されている所は、その名残だと思われます。具体的には、県名と県庁所在地の名称が異なる県です。

そして金沢は

中央政府は金沢縣の初代長官に加賀藩主だった前田慶寧を充てることはせず、江戸留め置きとし、維新に功績のあつた薩摩藩（七十七万石）から内田政風を着任させたのでした。

内田は同郷ながら年下の西郷隆盛の一方的な采配に、当初は着任を断つていたのですが、郷里の同胞の窮地を救うべく、加賀へ来ることを承諾しました。



明治初期の府舎を模した入り口

中央政府からの返答は、「縣庁を旧本吉美川町に移転させ、縣名は石川縣とするよう」にと
いう書簡が明治5年2月に届き、4月に縣庁は金沢の長町から美川の南町に移転しました。

県庁がきた美川では

職員の日記からは縣庁の執務を行うには本吉奉行所跡地は甚だ狭く、薄暗いと酷評され、茶碗酒にスルメ・蒲鉾で祝うという質素な開庁式を挙げたとされ、内田が加賀藩士から命を狙われる状況に変わりは無く、職員は民家で寝泊まりし、広い民家や寺院・神社を執務に借用する手だてを行い、時には船で沖へ出て事務を行うなど、気苦労の跡が見てとれます。

美川にあつた時の縣庁には庶務課、租税課、出納課、聽訴課が配置され、内田は月給二百両、今の副知事にあたる桐山は

いた県の区域と縣庁の位置を主な理由にかこつけて、金沢は県の北寄り過ぎて運輸通信上不便である。交通の要所で栄えていた美川に縣庁を移転させ、名も美川県と改めたいと、中央政府に具申したのでした。

当時の金沢には武士や藩に關係した仕事に携わる者が、人口の四割もいて、その落ち込みようといったら筆舌尽くしがたいものであつたと言われるくらいでした。



石川ルーツ館外観

年1月1日とした）、学制の公布、西暦元年を皇紀660年とし、そして何より鎌倉時代から争点となつていた白山の帰属を加賀とすると決めたことでした。

駐車場からの参道に見晴らし

文化活動として利用されてい

る県民大学の刺繡教室や囲碁教

室も盛んに行われ、随時会員を

募集しています。

同百両で、一般職員は三十両から二十両でした。

内田は夜、宿泊先の竹多家で「夜もすがら寄せては返す波の音にくだくるものは心なりけり」と詠み、当時の苦労が偲ばれる短冊を残しています。

県の区域はその後も変遷し、

能登七尾県が石川県に統合され、美川は県の中央としての意味は無くなり、明治6年1月に僅か八ヶ月足らずで県庁は、金沢の広坂に移つて行きました。

縣名は金沢に戻つても「金沢縣」になることは無く、「石川縣」のまま今日まで来ています。

美川に縣庁

があるときに行われた主な仕事は、戸籍の整備、太陽暦の採用（明治5年12月3日を明治6

年1月1日とした）、学制の公布、西暦元年を皇紀660年とし、そして何より鎌倉時代から争点となつていた白山の帰属を加賀とすると決めたことでした。

返歌は「浜千鳥　金の沢に帰るとも　おのがあさりの道を捨てるなよ」というものでした。

催しもの

ルーツ館では毎年秋に、企画展を開催し、所蔵品の中から厳選したものを順次公開しています。

手取川の清流と自然、河口に立った縣庁職員森田は「浜千鳥　美川の浦をふりすて　金の沢にもどるなり」とその喜びを著しました。これに対する内田の返歌は「浜千鳥　金の沢に帰るとも　おのがあさりの道を捨てるなよ」というものでした。

手取川の清流と自然、河口に立った北前船の紹介、明治初期の石川縣庁、豪商が惜しげもなく寄進したことなどを物語る「おかえり祭り」の風情を是非味わってみてください。

また各種の会議や展示のご利用にもお応えできます。

（文責　伊藤）

た。廢仏毀釈も縣庁職員の森田平次により徹底して行われました。この年は、横浜に日本で初めてガス灯が灯り、ラムネが出た年でもありました。

手取川の清流と自然、河口に立った北前船の紹介、明治初期の石川縣庁、豪商が惜しげもなく寄進したことなどを物語る「おかえり祭り」の風情を是非味わってみてください。

また各種の会議や展示のご利用にもお応えできます。

加賀の一一向一揆

百姓の持つたる国の成立

室町時代の末期になると、日本では幕府への不満・反発から、各地で一揆が起ります。

一揆には、土一揆・国一揆・一向一揆の三つが挙げられ、有名なものには、生長の土一揆、山城の国一揆、雜賀一揆、加賀の一揆があります。

簡単に説明すると、土一揆は、農民たちが団結して、年貢を軽くさせたり、お金の貸借関係を無効にする、徳政を要求して戦つた一揆です。

国一揆は、土一揆が大きくなり、地元の国人も加わっての一揆をさします。一向一揆は、本願寺門徒を中心に、各地の政治や社会状況を背景に起つた一揆ということになります。一揆は、

富樫家では、これまで家督を

各地で起りますが、当時の時代背景を見ていくと、京の都では室町幕府の権力が弱まり、畠山家の家督争いに端を発して、これに、將軍家の後継問題が生じ、日野富子を中心とした「細川勝元対山名宗全」の構図ができあがり、約十年間「応仁の乱」がありました。京の都は焼け野原と化けし、室町幕府が衰弱する一方で、下克上の風潮が強まり、全国各地で戦国大名が誕生します。中でも、織田信長・上杉謙信・武田信玄・今川義元・齋藤道三らの有力者が、次々に台頭し、誰が天下を取るのか判らな

い時代でした。十五世紀の加賀を見ると、一武将から守護大名は守護に固執し、近江出兵の費用徴収を行ったため、文明一揆

のときは味方であつた本願寺門徒が、今度は逆に、正親の反旗

めぐつての争いや、一時的にで

すが、赤松正則に守護職を譲ることになつたり、一族郎党の中で、争いが繰り返されました。そのような中、京で起つた応仁

の乱が、富樫家の運命を左右しました。ついに、兄「正親」と弟「幸千代」との間で、家督争いが激化します。この争いは、本願寺門徒と高田門徒の争いともいうことができ、ここに、加賀一向一揆の火蓋がきつて落とされたのです。

この争いは、本願寺門徒を味方につけた正親軍の勝利に終ります。これが文明一揆です。

しかし、一揆は農民に軍費の徴収・徵兵がなされ、犠牲者も多数でたため大きな痛手となりました。

加賀の国での一揆

長享二年に(一四八八年)、守護富樫正親を石川郡高尾城に攻め滅ぼしたことにより、加賀の国に「百姓の持つたる国」が誕生し、約百年にわたり続きます。

さらに、文明の一揆後、正親は守護に固執し、近江出兵の費用徴収を行つたため、文明一揆なく、その中心は、百姓である農民でした。

農民はこれまで泣き寝入り

を翻します。

信仰が広まり発展していく中で、農民の結合・團結力も高まり、不平不満を爆発させ、実行行動にできます。

そして、ついに守護正親を高尾城で自害に追い込みました。

これは、長享一揆と呼ばれ、「百姓の持つたる国」の始まりでもありました。一向一揆の便動力は、農民のエネルギーであり、その裏には浄土真宗への信仰心があつたのです。

をしていましたが、一揆という実力行動へと動かし田野は信仰心、そして、そして信仰から生まれる、横のつながり、つまり団結力でした。信仰のルーツをたどつてみると、蓮如上人の布教活動と大きく関わりがあります。

文明三年（一四七一年）に、本願寺八代法主蓮如が北陸での布教活動の拠点として、越前の吉崎に道場を建立したことにより、加賀でも浄土真宗の教えが急速に浸透します。

蓮如が法主を継いだ頃の本願寺は、親鸞を宗祖とする鎌倉新仏教のひとつでしたが、訪れる客も無く、寂れきっていました。

蓮如は親鸞の説いた念佛の思想を、門徒にわかりやすく教えようとして、御文を門徒に与えながら、布教活動を行いました。そして、北陸には、法主の座にく後ろ盾となってくれた叔父の如乗（金沢二俣本願寺の創立者）がおられることも在り、北

陸の交通の要所である、吉崎（福井県あわら市）を北陸布教の中核に決めたのでした。

蓮如は、吉崎でも精力的に御文を作り、門徒たちに、次々と与えたことから、北陸一円に門徒が爆発的に増えました。

門徒が増えると、御文が悪用されることもありました。蓮如が教えもしないことを勝手に説きまわり、守護・地頭への政治的圧力に対して、対抗・無視する行動をとる武士や門徒も出きました。こういった行動が、のちに一向一揆の原動力に成長していったのです。

当時の農民は、税に苦しんでおり蓮如による「仏の本願を信ずる者は、全て極楽往生することができる」という教えに感動を覚え、北陸の地は、本願寺門徒であふれました。

蓮如は信仰が戦いへと結びつくことには反対でしたが、その意に反し、本願寺における武士

門徒衆が、一揆の中心的存在になります。

その中でも、山内衆の働きは、めざましく、最後まで抵抗した組でもあります、「百姓の持ちたる国」の成立にはなくてはならない存在でした。

「山内」とは、手取川の渓口集落である白山市（旧石川郡鶴来町）より以南、手取川本流及び支流大日川、尾添川の白山山麓の地域をいいます。

白山市（旧鳥越村）も、「山内」に含まれていますが、「山内」では古くから白山の麓であるところから、崇高な山に神がおられるという思想のもと、平安時代から鎌倉時代にかけて、白山信仰が栄えました。

白山信仰につちかわれた阿弥陀信仰が、浄土真宗の普及により本願寺門徒を組織し、下克上という時代背景のなかで、一向一揆を発生させたのでした。

そして、長享二年に守護富樫

門徒衆が、一揆の中心的存在になります。

山内衆の動きを示すものとして、本願寺顯如上人から「毎度抽んでて馳走神妙に候 弥頼み入る計りに候」との書状が挙げられ、山内衆の信仰の厚さを示しております。

正親を倒すことにより「百姓の持つたる国」が成立し、農民による自治国家となるのです。

山内衆を統率し、最後まで織田信長と戦ったのは鈴木氏です。「鈴木系図」によると、鈴木氏と「山内」のつながりは、鎌倉初期の頃、鈴木三郎重家の子「重満」が紀州藤白から類縁の「福満公」を願つて、加州山内庄内二輪筈邑（二曲村 現在の白山市出合）に移り住んだときれる事から、鈴木氏と「山内」の関係は深まります。

（鳥越一向一揆歴史館 叢書 加賀一向一揆より）

（文責 安本）

山内と鈴木氏（絵）

山内衆を統率し、最後まで織

田信長と戦ったのは鈴木氏です。

「鈴木系図」によると、鈴木

氏と「山内」のつながりは、鎌

倉初期の頃、鈴木三郎重家の子

「重満」が紀州藤白から類縁の

「福満公」を願つて、加州山内

庄内二輪筈邑（二曲村 現在の白山市出合）に移り住んだとき

れる事から、鈴木氏と「山内」の関係は深まります。

（鳥越一向一揆歴史館 叢書 加賀一向一揆より）

平成24年度展示・行事予定

事業計画	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
千代女の里 俳句館	野本 永久展	俳画の 愉しみ展		文学の絵展		俳句と 写真展	千代女 特別陳列	俳句協会 会員展		ふるさと 交流展		中本怨堂展
松任博物館		企画展 金沢健介 植物細密画 梅と桜展	一品展 青木家 文書展	企画展 昭和の おもちゃ展			企画展 白山手取川水物語					企画展 昭和の写真展
松任中川一政 記念美術館		春季テーマ展 一政の薔薇、薔薇、薔薇		夏季テーマ展 風景、そして向日葵 第18回花を描こう絵画展		秋季テーマ展 一政の愛したマジョリカ壺	改修工事の ため休館		冬季テーマ展 椿作品を中心に			
石川ルーツ 交流館				子供行事		古酒屋孫次展		収蔵品展				
呉竹文庫		市指定文化財展				企画展						
松任 ふるさと館			庭園ライトアップ 「七夕夜灯」		庭園ライトアップ 「月見夜灯」							ひなまつり
鶴来博物館	鶴来櫻伝説展 —桜博士の功績—			一品展青い目の人形展 —日米の友情人形の悲運—		鶴来と白山麓の歴史と文化（常設展）	鶴来の昭和展 —昔の生活を振り返る—					
鳥越一向一揆 歴史観				西のぼる（展覧会）展								

※詳細については各館までお問い合わせください

【松任博物館】 ご寄贈ありがとうございます



金栄健介画 「旭桜」

- 金栄健介画植物細密画「梅と桜」図 70点。
金沢市八日市町在住の画家で、ボタニカルアーチストの金栄健介様より、氏の製作された「梅と桜」の植物細密画（ボタニカルアート）70点をご寄贈いただきました。ご寄贈いただきました細密画を中心に、平成24年度、松任博物館で企画展を開催いたします。
- 海軍満期記念盃・海軍礼装用帽子等軍装品 約300点
白山市 安田 義明 様
- 書籍 皇室の至宝「御物」全14巻 每日新聞社発行
白山市 木村 郁子 様

【松任博物館】 ボランティアありがとうございます

平成24年1月27日から、2月10日まで、市内の五つの小学校の三年生が、社会科の授業の中で「昔の道具を調べよう」と訪れました。ボランティアの中島正吾さんに博物館に来ていただき、子供達と一緒に展示されている昔の道具について一つ一つ説明していただきました。



編集後記

今年は、辰年。天を駆け上がる龍のように、力強く、奮い立つ年になるように祈っております。

(Y)